

炳靈寺石窟の西秦造像銘について

福 山 敏 男

中国甘肅省永靖県城の西北約三五キロの黄河北岸の小積石山叢のうち大寺溝西岸の絶壁上にある炳靈寺石窟は、上寺と下寺と、両寺の中間の洞溝との三分からなっている。一九五二年の秋、中央人民政府文化部で組織した炳靈寺石窟勘察団が現地を調査し、翌年の春、麦積山石窟とともに文化芸術の宝庫の発見として世界に紹介され、その年に文化部社会文化事業管理局編の「炳靈寺石窟」が刊行された。

この石窟は六一年三月、全国重点文物保护单位に指定されたが、それに伴う保護管理の必要から、六三年四、五両月に、甘肅省文化局文物工作隊で組織した炳靈寺石窟調査組が第二次の詳細な調査を行なった。その成果の概要は同工作隊（董玉祥氏執筆）によって文物一九六三年第十期に「調査炳靈寺石窟的新収獲——第二次調査（一九六三）簡報——」と題して報告されている。

それによると、下寺で窟三四、龕一四九、上寺で窟一、龕三、洞溝で窟八、合計一九五窟龕の番号付けを行なったこと、前回の調査で知られていた北魏末期延昌二年（五一三）の曹子元造窟銘のほかに、西秦の建弘元年（四二〇）の銘をはじめ、北魏延昌四年（五一五）、唐儀鳳三年（六七八）、永隆二年（六八一）、天宝二年（七四三）、元至正二十六年（一三六六）の漢文銘と西夏文字等の銘を発見したことが知られるし、下寺の一八三窟龕を仏像彫刻や壁画の様式によって分けると、大部分は隋・唐の作であるが、窟二つは西秦、窟七と龕三〇は北魏末期の作であるとしている。

西秦の建弘の銘文は第一六九窟（通称「天橋南洞」）にあり、中国の諸石窟中最

炳靈寺石窟の西秦造像銘について

古の造像銘として重視されねばならないが、残念ながら、右の簡報では建弘元年の銘記があるというだけで、その銘の全文も主要部も活字として示してはいない。しかしその銘の一部の写真が簡報の図版に出してあるのは、せめてもの幸である。

この第一六九窟は炳靈寺石窟中最大の規模をもち、内容も最も豊富であるという。大寺溝の水面から六〇メートル以上も高所にある天然の洞窟を利用したもので、窟内は左右広さ二六・七五メートル、奥行八・五六メートル、高さ一五メートルほどあり、床面の中部はしみ出す地下水に浸蝕されて昔よりも低くなっている。

問題の銘文は、写真によると、窟内の東壁にあり、南面入口内のすぐ東側、もとの床面から三メートルほどの高さに、一枚の紙を貼ったような形で、白く塗った色紙形の上に、うす墨で縦に十数本の界線を引き、界線の内に銘文を墨で書いてある。下方に立つ調査中の人物を標準にして計測すると、色紙形は縦五〇センチ、横七〇センチほどの大きさと思われる。色紙形の全形写真と部分写真とを比較すると、銘文は十六行ほどのもので、界線の間隔には広狭があるが、一行平均四・四センチ、一字の大きさは方約二・五センチで、一行は四六文（駢儷体）の四字一句の五句、つまり二十字と推測される。銘の文字は第九—十六行の八行を写した部分写真だけでは多少読みとることができるが、丸みのある岩面に書いた銘文に接近して、特に文末の年記の部分にピントを合わせて撮影したため、終わりの二行は文字が割りによくわかるが、それから前の方になるに従ってピンぼけや外光の反射がひどくなって、写りがわるく、この写真から文末八行をみな読むことは不可能である。いまこれを十六行、一行二十字詰めのもものとして、銘文の判読を試みよう。（部分写真では第九—十二行の上部二字と第十三—十五行の上部二字半が切られて写っていない。）

銘文各行とも縦横の字ならびを整えることに留意し、第十五行までは空欄がなく、びっしりと書かれているが、大部分の文字は読めない。強いて読んでみ

付図1 炳靈寺石窟第169窟内東壁仏龕（左上に銘文がある）

ると、第九行は第十九字が「威」のようであり、第十行は第六字が「至」に近い字形で、第十一行は第三字が「真」、第六字が「以」、第十一字が「本」に近く、第十二行は第十字が「光」に近く、第十三行は末の三字が「冥極樂」、第十四行は第七字と第九字がともに「唯」、第十三―十五字が「靈留美」のようである。第十五―十六行は、

□□□□、大□凝匠、神儀重暉、揜茲遠衡、聖量□造、

建弘五年歲在玄枴三月廿四日造、

と読める。右の第十五行の第十三字は文字の中央に傷があるが、つくりの下部からみて、拾、捨、揜、揜ではなく、揜（取るの意）のようである。同行第十六字も文字の中央に傷があるが、左右の残画から、行がまゑとわかるから、衍か術かも知れないが、一応衡とみておくことにする。おそらくこの第十五行は西秦の王か有力な貴族が、この石窟の仏像と壁画を完成したことをのべた銘辞の

しめくりであろう。

終わりの第十六行は造像の年記で、第三字は、董氏はこれを「元」とするが、文字の中央に傷があって、写真では元・二・五・九の四字のうちどれか決めにくい。

しかし、玄枴は春秋左伝の襄公二十八年の条の「歳在星紀、而淫於玄枴」の西晋の杜預（二八四年歿）の注に「歳、歲星也、星紀在丑、斗牛之次、玄枴在子、虚危之次、……此年……（歲星）在星紀、明、……今已在玄枴、淫行失次」とあり、文選卷第十にのせる西晋の潘安仁（名は岳）元康二年壬子（二九二）五月の西征賦に「歲次玄枴、月旅蕤賓」とあり、尚書の堯典第一の「乃命羲和、欽若昊天、厯象日月星辰、敬授人時」の条の唐初の陸德明（貞觀初年歿）の經典釈文に日月の交会する十二の次を十二支にあてて列擧して「寅曰析木、卯曰大火、辰曰壽星、巳曰鶉尾、午曰鶉首、未曰鶉首、申曰實沈、酉曰大梁、戌曰降婁、亥曰娵訾、子曰玄枴、丑曰星紀」とある例

付図2 同上 西秦建弘墨書銘（後半）

からわかるように、十二支の子の異称である。日本でも長谷寺の千仏多宝仏塔銅板の銘に「歳次^(成)降妻^(日)漆兔上旬」とするのは、この十二次を用いた例である。

建弘は西秦三代目の王太祖乞伏熾磐の治世の後半の年号で、その九年まで続いたが、玄梶すなわち子の年は建弘五年の甲子だけである。従って右の年記は董氏の解説のように建弘元年ではなく、「建弘五年」(四二四)と読むべきものであることがわかる。

この銘文の文字は六朝の書風にふさわしく筆太で力強い。年記の第三字を「五」としてみると、最後の画^くの「在」に正適する強勁な筆法といえよう。

また壁画の仏・菩薩や供養者の像の側に短冊形を画してその名を墨書してあるのも西秦当時のもので、建弘の銘の下方の一行の供養者には「□大禪師曇摩毘之象」「比丘道融之象」「比丘慧普之象」などと記されているという。

窟内の壁面に作られた三十に近い仏龕の像は多くは一仏と一菩薩、あるいは一仏と二菩薩からなり、單龕内には多く一立仏を作るが、その大部分は西秦時代の作で、石彫、石胎塑像、塑像の三技法からなっている。仏龕はアーチ形で、そのまわりを彩色文様や浮彫で飾ることもなく、簡素な作りである。單龕では舟形光背式の塑造アーチ形背屏を構え、そこに頭光と身光を描いてある。この背屏はキジル等の早期の石窟で見られる一形式に近いと董氏は注意している。

(付図は文物一九六三年第十期の図版による。)

図版要項

- 一 釈迦三尊図 釈迦 部分(原色刷)
京都 鹿 王 院 蔵
- 二 四 釈迦三尊図 釈迦・文殊・普賢
絹本着色 縦一三五・七cm 横 七七・二cm
京都 鹿 王 院 蔵
- 三 三星囲碁図
絹本着色 各縦一三五・七cm 横 七七・二cm
東京 根津美術館 蔵
- 四 出山釈迦図
絹本着色 縦 九四・七cm 横 四〇・五cm
兵庫 大 覚 寺 蔵
- 五 達磨図
絹本着色 縦二二〇・六cm 横一二四・一cm
福井 高 成 寺 蔵
- 六 洗象図
絹本着色 縦 七四・五cm 横 二六・九cm
東京 個 人 蔵
- 七 古写本『こわたの時雨』
以上参照 戸田禎佑論文「鹿王院釈迦三尊図について」
京都 吉田 忠氏 蔵

- 紙本墨書 綴葉装一帖 縦十五cm 横十六・三cm
- a 本文冒頭 一丁表
 - b 五十七丁裏 五十八丁表(和歌の書式を示す)
 - c 六十二丁裏 六十三丁表 本文末尾

参照 田村悦子論文「吉田忠氏蔵古写本『こわたの時雨』について 上」